

1. 魚 非 魚 / FISH NOT FISH

アーティスト：チャン・ヨンチア & トウ・ミンワ

会場：小樽中央市場

北海道小樽市稲穂3丁目11-2 〒047-0032

私たちは、魚を直接刷ることによって記録し、残す伝統的な技法である魚拓（Gyotaku / 魚拓）に魅了されました。日本で知られている最も古い魚拓作品は、1839年にまでさかのぼります。

また私たちは、小樽の歴史、そして自然、人々、さらに1850年代のニシンのゴールドドラッシュと、それによって活気ある都市が形成されていったこととの複雑な関係に深く結びついている魚、ニシン（鮭）についても探求したいと考えました。

魚そのものを除けば、魚拓を作るための材料は、水墨画を作るためのものとまったく同じです。中国系マレーシア人の3世である私たちにとって、魚拓を制作するうちに、かつてライスペーパーに絵や文字を描いていた記憶がふとよみがえりました。それは、マレーシアの華人ディアスポラにとって、さまざまな含意とノスタルジアを伴う実践です。

子どもの頃から親しんできた水墨画や書の素材を使いながら、それを魚拓や漢字を取り入れた馴染みのない方法で用いることで、私たちは水墨画をより自由に解釈することができ、イメージと書かれた言葉との相互につながった関係を、より大胆に探求できると感じました。

魚拓はシンプルな技法ですが、習得するには何年ものかかり得るものです。私たちが試みるなかで、ときには失敗します。しかし、その失敗のなかから、刷りによって生まれる質感、痕跡、パターンから、予期しなかったイメージが現れてくることを発見します。私たちはそうした間違いを修正するのではなく、それらを受け入れ、歪んだニシンの形を使って、新しいイメージと意味を作り出します。

私たちは特に、「鮭（ニシン）」という文字に関心を持つようになりました。この文字は、「fish（魚）」を意味する「魚」と、「not（～ではない）」または「negation（否定）」を意味する「非」から構成されています。そこから私たちは、ニシンの魚拓を作ると同時に、ニシンを何か「魚ではないもの」にする、というアイデアで遊ぶようになりました。

魚を刷り、歪ませ、変形させ、さらに文字を加えるというプロセスを通して、私たちは馴染みのないもの——奇妙で居心地の悪いもの、しかしおそらく、私たち全員が今生きている現実をますます映し出しているもの——を探しています。

そして同時に、馴染みのないものを想像しようとする私たちの試みは、過去と再びつながろうとする試みでもありま

す。ニシンは私たちに小樽の歴史を思い起こさせ、一方で魚拓は、自然を観察し記録する伝統的な方法へと私たちをつなげます。

自然との私たちの関係を振り返ることで、不確かな未来を進んでいくための助けとなる何かを見つけたいと私たちは願っています。そしておそらく、好奇心と少しのユーモアをもって、不完全なものや予期しなかったもののなかに、わずかな希望を見つけることができればと思っています。

2. Batik Sarongs for Migrated Malaysian

移民マレーシア人のためのバティック・サロン

アーティスト：チャン・ヨンチア & トウ・ミンワ

会場：旧日本郵船株式会社小樽支店

北海道小樽市色内3丁目7-8 〒047-0031

バティックはマレーシアの国民的な衣装です。¹サロンは、アーティストの子ども時代の記憶において、日常的な普段着であり、家庭用品でもあります。アーティストは、マレーシア人のアイデンティティとは何かを問いかけるための媒体として、バティック・サロンを使用しています。

これらの作品は、オーストラリアのパースで開催された2024年 Indian Ocean Crafts Triennial（IOTA24）で初めて展示されたシリーズの一部です。それらは、西オーストラリア州へ移住したマレーシア人へのインタビューから集められた物語をもとにしています。もともとの国家の境界から解放されたとき、その人の個人的、そして文化的なアイデンティティはどうなるのでしょうか。

これらの作品は旧日本郵船株式会社と直接的なつながりを持っているわけではありませんが、私たちは、人々と物の移動に関係してきたこの建物の歴史を理由に、ここでこれらの作品を展示することを選びました。

かつて海運と交易を通してさまざまな場所を結びつけるネットワークの一部であったこの建物は、移住について考えるための意味のある場所を提供します。移住を、単に人々が国境を越えて移動することとしてではなく、記憶、伝統、アイデンティティ、そして物語を、ある場所から別の場所へと運ぶこととして考えるための場所です。

（マレーシアからオーストラリアへ移住した人々へのインタビュー：チャン・ヨンチア & トウ・ミンワ）

¹ サロンはインドネシアやマレー半島で用いられるロングスカート状の腰布で、現地の気候に適した涼しい服装です。

* ヨンチア & ミンワの滞在制作活動成果報告展は、Otaru Creative Week 2026 共催イベントとして実施される展覧会『再』の一部として開催されています。

展覧会『再』

【展覧会『再』開催概要】

「第5回 AIR NETWORK MEETING 北海道大会— 空間と再生 —」（主催：NPO法人 S-AIR、AIR NETWORK JAPAN）との連携のもと、旧第3倉庫、旧早川支店、旧前堀商店など北運河エリアの歴史的建造物群を活用したアート展覧会です。北海道内を拠点とする作家による展示のほか、マレーシアの招聘アーティスト、Chang Y oong Chia & Teoh Ming Wah チャン・ヨンチア & トウ・ミンワによる約1ヶ月間の滞在制作成果も披露されます。

■ 参加作家 & 会場

- ・ 澁木 智宏 / Shibuki Tomohiro、鈴木 悠哉 / Suzuki Y uya：旧第3倉庫（外壁・内部）
- ・ ayumi sato、タブチトヨアキ / Toyoaki Tabuchi：旧早川支店（現：vivre sa vie+mi-yyu）
- ・ HiNA、中村 篤弥 / Nakamura Atsuya：旧前堀商店
- ・ チャン・ヨンチア / Y oong Chia Chang & トウ・ミンワ / Ming Wah Teoh：小樽中央市場、旧日本郵船株式会社小樽支店

■ 会期：2026年9月25日(金)～27日（日）

■ キュレーター：鳥井麻祐（小樽市北運河地区地域おこし協力隊）

アーティスト・プロフィール

CHANG Y oong Chia（チャン・ヨン・チア）

CHANG Y oong Chiaは、マレーシア芸術学院（Malaysian Institute of Art）でファインアートのディプロマを取得。「Second Life（セカンド・ライフ）」を制作の核となるコンセプトに据え、手仕事による反復的な制作プロセスを重視し、素材の変容を通して新たな意味が立ち現れることを探究している。2011年には、切手を用いたコラージュ作品《The World is Flat》が、シンガポールのSignature Art Prizeのファイナリストに選出された。2018年には、マレーシア国立美術館（National Art Gallery of Malaysia）において、これまでの活動を総覧する個展「Second Life」を開催。これまでアジア、ヨーロッパ、オーストラリア各地において、数多くの国際展やアーティスト・イン・レジデンス・プログラムに参加している。

TEOH Ming Wah（トウ・ミン・ワー）

TEOH Ming Wahは、リサーチ、執筆、そして学際的な実践を通じて、地域コミュニティと文化・歴史を結びつける活動を行うライター／カルチュラル・ワーカーである。台湾大学社会学科を卒業後、台湾中部地震（921大地震）の復興過程において、パブリックアートやコミュニティ形成、地域再生のプロジェクトに携わった。2002年以降はマレーシアを拠点に芸術文化活動を展開し、映画監督Loh Kok Manとの協働により、BOH Cameronian Arts Awardsで最優秀オリジナル脚本賞を受賞。元新聞記者でもあり、現在もコラム執筆、美術出版、キュラトリアル・プロジェクトなど幅広い分野で活動している。現在は、CHANG Y oong Chiaとともに、歴史と幻想を交錯させたグラフィックノベルの制作に取り組んでいる。

- 主催 | NPO法人 S-AIR
- 共催 | Otaru Creative Week 2026 / NPO法人 OTARU CREATIVE PLUS
- 助成 | 万国博覧会記念基金、公益社団法人 北海道国際交流・協力総合センター（HIECC）国際交流補助金
- 協力 | tug-b Bar & Hostel、AIR NETWORK JAPAN、さっぽろ天神山アートスタジオ
- AIRコーディネート | 小田井真美（さっぽろ天神山アートスタジオ）、進藤冬華（アーティスト）
- 謝辞 | 高石智貴、高石美幸、南部亜矢子、Jude Van Der Merwe、disco used&vintage、bum curry & cafe、柴田尚（npo S-AIR）、鳥井麻祐（小樽市北運河地区地域おこし協力隊／NPO法人 OTARU CREATIVE PLUS）、その他の小樽で出会ったみなさん（順不同、敬称略）